# 日美子の夢街道旅行

斎藤栄

中公文庫

中公文庫

# 日美子の夢街道旅行

定価はカバーに表示してあります。

1998年6月3日印刷
1998年6月18日発行

著　者　斎藤　栄

発行者　笠松　巌

発行所　中央公論社　〒104-8320 東京都中央区京橋2-8-7
TEL 03-3563-1431(販売部)　03-3563-3664(編集部)　振替 00120-4-34

©1998 CHUOKORON-SHA,INC. / Sakae Saito

本文・カバー印刷 三晃印刷　用紙 王子製紙　製本 小泉製本

ISBN4-12-203162-1　C1193　Printed in Japan

乱丁本・落丁本は小社販売部宛お送り下さい。送料小社負担にてお取り替えいたします。

中公文庫

# 日美子の夢街道旅行

中央公論社

目次

第一章　円谷万千子　7
第二章　滝川警部補　40
第三章　柿崎朋子　75
第四章　藤川さとみ　110
第五章　南沢　聖　146
第六章　八重樫　愛　180
第七章　穴田克哉　214

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第八章　家永袈裟子　248
終　章　ホレイショーは誰？　281
解　説　影山荘一　315

# 日美子の夢街道旅行

# 第一章　円谷万千子

## 1

二階堂日美子の午前中の仕事といえば、主婦として、この埃(ほこり)っぽい鎌倉・材木座の家を掃除することが多いけれど、いつもそうとは限らなかった。

この日の朝。彼女は、〈関東タロット研究会〉の副会長として、会の仕事の関係で、あちらこちらに、電話をかける必要があった。

〈……ええと金丸さんは逗子(ずし)だから、0468の……73……か。それから、安西さんは立川市で、0425、22の……〉

という風に、しばらく、沢山の数字と睨(にら)めっこしては、電話をかけ、会員との連絡を終えた。

その後、十時頃に、近所の取引銀行まで出かけ、キャッシュ・カードで現金をおろした。暗証番号は、日美子の亡父の生年月日、11月3日からとった〈1103〉だった。

現代は、日常生活の至るところに、数字が関係している。記憶しておかなくてはならない数字は、実に多いのだ。

日美子の家には、小さな金庫がある。これは夫の二階堂が、仕事で大切な品を、一時的に自宅へ持ってくることがある、そのとき、その品を入れておくものだ。この金庫のナンバーも、忘れてはならない。

それから、自宅の裏の勝手口は、ダイヤル式の数字合わせで、開けることのできる錠前がつけてある。その数字も憶えておく必要があるのだ。

二階堂警部は、数字の記憶力がいい。いつだったか、彼は日美子に、

「おまえは、言葉の魔術師みたいなところがあるが、数字には弱いね」

と言ったことがある。

〈本当に……私は数字をみていると、疲れてしまうわ〉

銀行から帰って来た日美子は、そんな風に思った。

すると、このとき、黒電話のベルが鳴った。電話ナンバーのことなどを考えていた彼女は、ハッとした。

送受器を取りあげてみると、珍しい友人の声だった。
「私……円谷万千子よ。あなたにご相談があるの。これからお邪魔してもいい？」
「いいわよ。私も今、外から、帰って来たところなの。あなた、どこからかけているの？」
「実はね、鎌倉駅に着いたところよ」
「まあ。そうなの、じゃ、どうぞ。歓迎するわ」
「突然でご免なさい。私、あなたに占っていただきたいことがあって……」
この申し出も、日美子は慣れっこになっていた。
「ええ、結構よ。とにかく、すぐにいらっしゃい」
そう言って電話を切った日美子は、
〈あの声の調子では、相当、重大な相談らしいわ〉
と、直感した。

## 2

円谷万千子は、日美子が家の中を、大急ぎで片付け、紅茶をいれる間もなく、玄関先に

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

現われた。
万千子は平塚に住んでいる。鎌倉とはそんなに遠くないが、お互いに行き来することはほとんどなかった。
彼女をひと目見た日美子は、びっくりした。なぜなら、大体が痩せぎすのタイプなのに、その顎が尖って、肉が落ち、彼女の目ばかりがギラギラと輝いている様子は、普通ではなかったからだ。
〈あら。あなた、痩せたわねえ〉
と、咽喉のところまで出かかった言葉を呑み込んで、日美子は、
「あがって頂戴。ちらかしていますけど……」
と言った。
白い半袖のブラウスに、今年流行の黒いスカートをはいた万千子は、手に鎌倉駅前の〈倉田洋菓子〉のケーキを持っていた。
「あなた、これ、お好きだと思って買って来たのよ」
と、彼女は言った。
「ありがとう。手ぶらでいらっしゃってよかったのに……」
「でも、厄介なこと、お願いに来たのよ」

「ま、お坐りになって」
日美子は、ダイニングキッチンの椅子に、彼女を坐らせた。和室よりも、ここの方が、万千子には似合っていると思ったし、同級生の場合は、二人で話をしながら、紅茶などをサービスするのに、なにかと便利だったからである。
「日美子さん……」
思い詰めたように、万千子が切り出した。
「なあに？」
「うちのひとがいなくなってしまったのよ」
「えっ。ご主人が……」
「そうなの」
「いつ？」
「今日で、丁度、十日になるわ」
と、万千子は言うと同時に、耐えてきた悲しみが堰を切ったように溢れ出し、彼女はハンカチを目に当てた。
「警察の方は？」
「地元の警察署に届けたわ」

「そう」

「でも、家出みたいに扱われて……。大人の家出人なんて、真剣に捜してはくれないのね」

「ご主人は……家出じゃないんでしょう？」

と、日美子は念を押した。

「とんでもないわ。家出をするような男じゃないのよ」

じっと日美子を見た万千子の瞳は、赤く充血していた。

日美子が、同窓会のとき、万千子から聞いた話では、夫の円谷信一は私立羽根沢中学の教諭で、数学を教えている。万千子より十二歳も年齢上だが、彼らは、従兄妹同士の結婚で、親の反対を押し切っての恋愛結婚だという。

日美子は、万千子が、ひと廻りも年齢上の男と結婚したというので、よく覚えていた。

「あなたに心当りはないの？」

と、日美子は訊いた。

「ハッキリとはないのよ。ただ……ある程度は……。でも、よく分からなくて、あなたに占っていただいて、何かをつかみたかったの。日美子さん、みんなの相談にのってらっしゃるんでしょう？……よく当ると聞いてるわ」

と、万千子は救いを求めるように、テーブルの上に身をのり出した。
「そうでもないけど……。いままでにも、そんな風に、急に出かけられるってこと、あったの？」
「夫は、中学の先生でしょう？　教師というのは、とても忙しいのよ。無断欠勤なんか、ほとんどしないし、できないのね。初めてよ、こんなの……。ただ……」
「何かあるの？」
「これからゆっくり、お話するけど、あの夫は、とても気が弱くて、決断が鈍いところがあるの。だから、迷ってしまって……悩みを私にも打ち明けられないで、出るに出られないのかも……」
「そう」
「円谷は、学校で生徒につけられたニックネームが、ハムレットというのよ」
「To be or not to be……という、優柔不断の象徴として？」
「ううん。今の中学生は、そんなことでニックネームにはつけないのね。主人の顔が、ハムスターに似ているといって、初め、ハムスターだったらしいの。それを主人が『ハムスターなら、ハムレットがいい』と言ったら、生徒達は、ハムレットも、ハムスターの仲間だと思ったみたいね。それから、ハムレットと呼ばれるようになったんですって……」

「まあ……」
日美子は呆れた。まったく、そんな調子では、地下のシェークスピアも、大いに嘆くのではないか。
しかし、この際は、円谷信一のニックネームについて、どうのこうのと言っているときではなかった。
日美子は話を本題に戻した。

3

「万千子さん。あなたのご主人のこと……まるきり、手がかりがないってわけじゃないんでしょう?」
愛し合っていた夫婦ならばこそ、何かをつかんでいるだろうと、日美子は思った。もし、自分の夫、二階堂警部が、急にどこかへ行ったとしたら、必死になって調べ、考え、きっと、手がかりをつかむに違いないと、空想した。
円谷信一と万千子の、その情愛溢れる生活について、日美子は聞いていた。
「ええ、参考になるかと思って、ここに主人の日常、使っていた手帳型ダイヤリーを持っ

て来たわ」

と、万千子は言って、ポシェットタイプのバッグの中から、一冊の小さな手帳を取り出して、目の前のテーブルに置いた。

「拝見していい？」

と、日美子は訊いた。

「どうぞ」

パラパラとページをめくると、その手帳は、一ページが二日分ずつに区切られており、そこに、付属の鉛筆で、びっしりと、いろいろの文字や記号や数字が細かに書き込まれていた。

その大部分は、教職の身にある円谷が、公務中心のメモをつけたものらしかった。その中にまじって、〈MACHIにプレゼント〉などと書いてある。

その特徴は、何かの数字や暗号みたいな略号の多いことだった。

〈さすが、数学の先生だわ……〉

と、日美子は思った。

このダイヤリーの書き込みは、八月三十日までで、三十一日から以降は空欄だった。

「これでみると、ご主人は、先月の三十日まで……いらっしゃったのね」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com